

この度、私は、2025/6/26～2025/6/28 にかけてカザフスタン共和国の首都アスタナで開催された 11th-EurAsian Radiological Congress における RSK meet JRS にて講演させていただきました。



呼吸器内科や呼吸器外科の先生方と共同で、継続的に研究を行っている呼吸動態 CT の臨床的な有用性や可能性が、私の講演の内容となります。呼吸動態 CT では、一般的に、320 列 CT 等の面検出器 CT を用いて胸部

単純 X 線撮影の正面像と側面像を合計した被曝線量すなわち超低線量撮影を、非強制換気下で連続的にデータ収集を行います。0.25 秒から 0.35 秒間隔で逐次近似応用あるいは逐次近似再構成により画像データを作成し、呼吸機能検査における一回換気量と肺気量の間程度程度の換気状態における、末梢肺野・中枢気道・肺動脈・胸膜・肋骨や肋間筋を含めた胸壁の呼吸運動を評価する CT ということになります。

聴講いただいた各国の先生方の多くは、おそらく呼吸動態 CT という概念に初めてふれることが予想されました。実際の呼吸動態 CT ではどのような画像がえられるのかを視覚的に理解いただくことが重要と考え、肺野だけでなく、気道・肺動脈・肋間筋等の動態画像をできる多く供覧する内容といたしました。



学会には、カザフスタン等の中央アジアの国々やロシア以外に、韓国、台湾、中国、香港、タイ、インド、サウジアラビア等の他のアジアの国々、ヨーロッパ各国等多くの国の先生が参加されていました。毎日開催された懇親会に参加させていただき、懇親会や学会場でもある宿泊先のホテルのバーでの二次

会等で、様々な国の先生方と夜遅くまで交流・意見交換をすることができ、有意義な経験となりました。

今回はじめて中央アジアを訪問しましたが、学会に参加する合間に訪れたアスタナの街は、秋に開通する予定の高架鉄道や多くの高層ビルディングや道路等、建設途中の様々な建築物であふれており、これから益々拡大・発展していくことが感じられました。カザフスタン共和国は世界最大の内陸国ということで、道路や橋、博物館、ビルディングだけでなく、訪問させていただいた病院も、日本では想像できないぐらい、大きく余裕のあるつくりとなっていることが印象的でした。

最後に、このような貴重な講演の機会を与えていただきました、理事長の富山 憲幸先生をはじめ、国際交流委員会の関係各位の先生方に深く感謝申し上げます。

滋賀医科大学 放射線科
永谷 幸裕